

【沖縄】患者と距離が近い、チャレンジしやすい…30代医師夫婦が話す離島診療の魅力-有路登志紀・春香・久高診療所医師に聞く◆Vol.3

2022年10月21日（金）配信 m3.com地域版

「患者の生活圏で暮らすと見えてくるものがたくさんある」――。2021年から久高診療所（南城市）で働く30代医師夫婦の有路登志紀・春香氏は離島診療の魅力をこう話す。患者と距離が近く子育てがしやすい、医師次第でいろいろなチャレンジができる。そんな利点がある一方、「試行錯誤した」（登志紀氏）ことも。診療所に着任して約1年半。2人に振り返ってもらった。（2022年9月19日インタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら

――久高診療所に着任して約1年半。登志紀先生は離島診療のやりがいをどう感じていますか。

登志紀 久高島の場合、患者さんのコミュニティー内で私たち医師も生活していることが大きな特徴です。病院で働いていたときは患者さんの生活背景が見えづらいこともありましたが、人口約200人のこの島だと一人一人と顔の見える関係を築くことができ、それが診療の質を高めているように思います。

患者さんがどんな仕事をしているか、どんな家族構成で誰が親族に当たるのか。そういったことを自然に知れますし、道端や買い物中など普段の生活の場で患者さんとお会いすることもあります。世間話をしながらそれとなく体調を尋ねることで病状の理解に役立ちますし、患者さん側も自分の生活を知っている医師だと相談しやすいのでは。病気が重くなる前に教えてくれたり、自分の家族のことを相談してくれたりします。島のコミュニティーの一員になることで、診療外でも「島民が健康に過ごせるように」という視点が生まれたことは大きな変化です。



有路登志紀氏（本人提供）

――離島診療を始める前、「外科の経験を生かして地域医療に貢献したい」と考えていたそうですが、これは叶えられているのでしょうか。

登志紀 そうですね、実現できていると思います。診療所では手術はしていませんが、そもそも私が外科でやりたかったことは手術スキルがあることを前提に、手術を含めた診断や治療方針の決定に携わり、患者さんを支えていくことです。すぐに手術が必要なのかもう少し待てるのかという微妙な判断をプロとして行い、患者さんからすれば難しいであろうがんなどの病気を分かりやすく説明し、患者さんが今後の人生を考えるお手伝いをしたいと考えていました。

医学的なことは教科書を読めば知れます。その行間にあること、つまり「病気とどう付き合い、人生とどう向き合うか」を患者さんが考えていくためのサポートを重視していた私にとって、外科で得られた手術以外の知識と技術が

離島診療でも生きています。患者さんに寄り添いながらその人の人生をみていく診療に向かっている手応えがありません。

——春香先生は子どものころから沖縄の離島が好きだったとのこと。実際に住んでみての感想は。

春香 島の人たちの一部になれていることに幸せを感じています。小さなコミュニティだからこそ移住者もその一員になりやすく、人々の生活の延長に医療があることを肌で感じられるのは楽しいですね。子どものころからの憧れを実現できています。

——春香先生は2021年、島民向けに公開講座を開いたり診療所便りを作ったりと診療外の活動も行ったそうですね。

春香 はい。去年は私が所長を務めていたので、自分の思いついたことを一つずつ形にしていきました。食育や認知症をテーマにした講座を開催したり、親交のあるお灸の先生を外部から招いてお試して島民に据えてもらったりしました。診療所便りには講座の結果報告や医療に関する翌月の予定、時事ネタなどを盛り込んで印刷し、島内に九つある掲示板にはりました。健康関連の書籍を診療所に置いて貸し出しを始めたことなど、診療所の取り組みも紹介しました。

これらのほか、医師がスピーカーを通して島内放送を行っていることも離島ならではのようです。予防接種や講座の案内、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の注意喚起など必要に応じてアナウンスしています。



島内放送も久高診療所医師の役割の一つ（本人提供）

——登志紀先生は「患者との距離の近さ」が離島診療の魅力だと感じているそうですが、患者の生活圏で暮らすことに抵抗はなかったのでしょうか。

登志紀 プライベートでも会う患者さんとどんな距離感で接すれば良いか、このあたりは自分なりに考えて試行錯誤しました。診療が「友人同士の会話」になってしまうと互いの思いがぶつかりやすくなってしまいう可能性がありますし、かといってあまりに引いた立場からの発言だと島民にはなじみづらいかもしれません。

相手が生きてきた環境や文化、それに連なる価値観や考えを受け止め、敬意を持って接する。そのうえでアウトサイダーである医師という立場を保って診療する。線を引くところは引くけれども、自分事にリンクさせてコミュニケーションを取る。こんなスタンスを徐々に築いていくことで、着任して1年を過ぎたころからは自分の中で暮らしと仕事がしっくりくるようになったと思います。

——最後に、同年代の医師に伝えたいことがあればお聞かせください。

春香 離島は医師としていろいろなチャレンジができる場所だと思います。私の場合は講座を開いたり診療所便りを作ったりしたほか、今は島の小中学生に英語やピアノを教えています。医師として自分の色を出そうと思えば出せる土壌があります。

ただ、「離島診療」と一口に言っても島の規模などによって求められる医師像が異なるかもしれないので、その点は留意しておく方が良いかもしれません。例えば私たちがいる久高島のように沖縄本島から近くて人口の少ない島だと

子育てしやすい利点がありますが、南大東島のように人口が多く本島から離れているところでは患者数が多いえ欠航などによって患者さんをすぐに本島に紹介できないこともあると聞くので、よりゼネラリストとしての腕が試される側面があると思います。自分が向いている島は医師のフェーズと希望によって異なってくるのではないのでしょうか。

登志紀 久高島に来て良かったのは、子どもとの時間を十分に取れることです。都会には都会の良さがあると思いますが、どうしても時間に追われやすいもの。地域で子どもを育てたいと考えていた私たちにとって、それを久高島で実現できたのはありがたいですね。

家と診療所と保育園がとても近いので移動に時間を取られないほか、子育て中のお母さんだけでなく多くの島民が子どもに積極的に関わってくれます。道を歩いていると子どもの名を呼んで手を振ってくれたり、立ち話をしてくれたりします。「私たちは受け入れられているんだ」という感覚を日々持つことは、きっと子どもにも良い影響を与えてくれると思います。

久高島で暮らしていると、水道やガス、商業などに携わっている人たちと日常的に接します。島で家を建てる時は「体の動ける人が手伝う」という珍しい文化もあります。顔の見える人たちでインフラが成り立っており、医療もその一部であること、皆で協力し合うことで生活できていることを改めて感じられるのは貴重な経験です。地域で子どもを育てたい先生は離島診療という方法もあることを知ってもらえると嬉しいですね。



久高島の空を背景に登志紀氏と春香氏（本人提供）

◆有路 登志紀（ありじ・としのり）氏

2011年群馬大学医学部卒。2013年に同大病態総合外科学講座に入局し、さいたま赤十字病院や原町赤十字病院などに勤務。2017年に森山記念病院消化器外科に移り、2021年からは沖縄県の離島・久高島の久高診療所に勤める。

◆有路 春香（ありじ・はるか）氏

2016年順天堂大学医学部卒。沖縄県立中部病院で初期研修を受けた後、ヨルダンなどで海外ボランティアに従事。東京都のクリニック勤務を経て2021年から久高診療所に勤める。現在は同大学院グローバルヘルスリサーチに在籍し、国際保健について学ぶ。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】



